

スミスとリカード：その労働価値論における差異

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

53

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

92

(発行年 / Year)

1985-07-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008449>

スミスとリカード

——その労働価値論における差異——

平 林 千 牧

- 一 はじめに
- 二 『原理』における「純化」の性格
- 三 リカードの労働過程把握
- 四 おわりに

一 はじめに

経済学の原理的規定の大枠として、価値と生産価格という社会的基準設定を取り上げ、そのなかでA・スミスとD・リカードの体系を対比してみると、スミスは価値論に成功したことによって生産価格（自然価格）のそれとの差異を確認することができたが、リカードは生産価格の解明を行ないえたと信じたことによって価値論のそれとの差異の論理化に直面することになったとみられる。もちろん、ここでスミス価値論の成功と言うのは、古典派の限界内でのことであり、リカードの生産価格の解明というのもなくまでも彼の理論自身に即していたにすぎない。しかしながら、古典派という脈絡のなかで、一方での価値論の成功と他方での生産価格論の解明とを関係づけ、そこ

に古典派としての独自の経済学の性格を闡明するという点になると、必ずしも簡単なこととはなりえない。その点は、すでに彼らの最良の批判者であったマルクスについてみてはかなり伺い知ることができるはずである。すなわち、マルクスの労働価値論の論証に付せられる疑問符は彼の「批判」体系上のスミス価値論批判にまつわることになるのであり、また同様にして彼の生産価格論の大枠をなす価値実体と生産価格との量的対応の視点は、リカードの修正論と無関係に生じたものではなかったのである。⁽¹⁾

したがって、古典派の理論体系を如何なる視角で取り上げるにしろ、総体として原理的体系の形成過程からするならば、当然のことながら、その最良の成果においても、それが占める部分的領域内での評価あるいはそれをなした個人の成果をふまえないお検討が行なわれなければならないであろう。とりわけ、スミス、リカードのごときわめて体系的原理的考察を与えたものの理論的特質ということになれば、それは最早個別的検討の範囲内に収まりえないものとなっている。この点は、実はマルクスの「剰余価値に関する諸学説」の部分における両者のいわば統合的批判においても見出しうるものである。もちろん、彼はその場合でも、先述のように価値論についてはスミスに、生産価格論についてはリカードに力点を置いているのであって、必ずしも名実ともに総合的に考察を加えているわけではない。また、一面では確かに、彼にとってもそうせざるをえない両者の理論的特徴の差異があったのである。だが、他面からすると、彼の理論的進展の度合を考慮しなければならないのはもちろんであって、スミスとリカードに対する批判点の差異のうちには原理的で体系的な批判の意図とは反する未成熟な観点があり問題を含むものとなっているのである。それは、つとに指摘されてきたことでもあって、スミス価値論への力点の置き方は、同時に彼自身の価値論を制約しつつ他方で剰余価値論に重点を置く生産価格論としてリカード批判や自己の論理的性格に限界を与えることになったのである。⁽²⁾ そうであるとすれば、スミス価値論は当然のことであるが、彼がそのうえに

批判的考察の対象としたリカードについても、まさにそのスミスを基礎に据えつつ内在的な吟味を加えなければならないのである。従来、そうしたことが行なわれなかったとするものではないが、ともするとマルクスのスミス把握を固定し、そこからリカードの理論的性格を洗い出すという傾向になっていた。

しかしながら、すでにマルクスのスミス批判について今日では重大な疑問が提起されることになっている。しかも、その疑問は、同時にマルクス自身の理論体系に対し、スミスの評価の再検討を通じて訂正されるべき内容をも提起するものであって、単なるスミス批判の当否のみに帰着するものではないのである。こうした経緯は、彼の「批判」体系の性格からすれば、当然またスミスに対する関係に留まりうるものではない。前述のように、リカードに対するそうした関係をも無視しえないはずである。しかも、スミス批判に疑問が生ずるということは、他面からすると、リカード批判についても問題が生じうることは避けられないのであり、かつまたそのさいには別にもう一つの考察手続が介在してこなければならぬのである。すなわち、それは、スミースリカードの関係からすれば、スミス評価の変更は必然的にリカード評価の変更を含まなければならないということであり、またそこには、リカードがこのようにスミスを批判的に克服した、とされているその理由及びそれによって決定されているリカード理論の解釈についても再検討されなければならないだろうということである。もちろん、こうしたことは、すでに多々検討されてきているのであるが、そしてその成果も十分尊重されねばならないがいまだ必ずしも納得的な解明とはなりえていない。とりわけ、先述のごときマルクスの体系との関係を考慮するならば、リカードの検討とマルクスの成果の再検討との関係において十分な結果は得られていないと思われるのである。

ところで、右のような点をふまえるとすれば、まずもって考慮されなければならないことは、スミスとの関係でリカードが原理的考察の構築のための絶対的要件とした点である。それは、明らかなように、『諸国民の富』第一

篇第五章と第六章との関連に対する彼の立脚点である。やや誇張して言えば、彼がスミスへの批判をしたがって論理的整合性の明確化を彼の体系化として推し進めえたのは、まさにスミスにおけるその関連が問題たりえたためであり、また同時にその問題の理解そのものが彼をして『原理』における彼自身の問題をも包含する結果とさせたといえよう。事實上、別のところでも指摘したように、マルクスも実は同様の問題を取り出し、かつまたそこに彼自身の難点を負うことになったのであって、事柄はきわめて重要な性格を担っているはずである。リカードでのその問題はいわゆる穀物法論争以降の考察の一種必然的な関係として近代社会の経済学的確定を進めた以上、先行の学説との関連としてはそこに帰着しなければならなかったという点でも当然のことであった。もちろん、その場合彼が近代社会の三階級社会関係を明確に考察の対象に設定したことで、スミスの当該箇所⁽⁴⁾の批判的克服を意図したこととは、問題として十分成り立つのであるが、またその解決についてはむしろ根本的な困難が絶体的とも言いうる性格をもって横たわっていたと考えられる。前者については、学説史上リカードをリカードたらしめていることであって、自明のことと言ってよいであろう。ところがその自明さについても、例えばマルクスが彼に対して結局スミスの提起した問題に「少しも気づいていないのである」⁽⁵⁾ということになるような批判をした際の考え方からするならば、必ずしも十分に自明なこととはなっていないのであろう。つまり、彼は「気づいてもいない」ことによって古典派としての彼の位置を決めていたのであり、またそうであったことにおいてスミスのいわば正統な継承者たるはずなのである。したがって、マルクスは確かに重要な指摘を行なったと言いうるが、スミースリカード関係を考慮した場合、その内在的関連において果たして十分なものであったかどうかは疑問なのである。後者については、前者のこのような点から、必然的な結果として生じうるのであって、まさに彼がスミスに対して批判的体系化という「気づき方」をしたさいに、別の意味で「気づいてもいない」根本的な理論的性格によって、彼の理論その

ものに限界を課せられていたための所産であつたらう。⁽⁷⁾

右のようなマルクスの指摘に関連させるならば、リカードが彼の問題意識によつてスミスに見出した(気づいた)ことと、それゆえ彼が解決を進めていったことと、彼がそのさいにお見出すことができなかったことを彼の理論のうちに明らかにすることは、必ずしも容易なことではない。マルクスはすでにスミス労働価値論に(したがつて第五章に)独立の存在理由を与えながらリカードに向つていたのであつて、リカードがその存在理由を否定し、むしろ三階級社会に沿うべきものとした考え方を無視しているのである。これは明らかにリカードの地位を意図的に無視するものである。マルクス自身、彼がリカードを本格的に考察の対象とし、そうすることによつて彼の「批判」体系を出発させたという経緯をもっているのであつて、この点からすれば、明確に三階級社会を対象として、いかにスミスを越えてゆくかについては、両者はスミスとの関係でひとまずかなり類似の立場にあつた。もちろん、両者は同様の土俵に上つてゐるわけではなかつた。しかし、古典派に対する「批判」体系のあるべき視角からすれば、リカードがスミス理論をいかに整理し、徹底していこうとしていたかが諒解されるはずであつただらう。したがつて、「気づいてもない」リカードの「正当性」がむしろ学説史のうえで十分考慮されなければならなかつたのである。

他方、リカード自身においては、そこにいわば一種異様なスミスの在り方に出合うことになるのであつて、周知のごとく彼の終生の問題を抱えることになつた。ところが、これは、彼自身の問題であるだけでなく、『原理』そのものの理論に含まれる理解の困難としても存在することになつてゐる。周知のように、彼の『原理』の理論部分は、論理においてきわめて明瞭のようでありながら、すでに当初の価値論そのものが交換価値、絶対価値、生産の抽象的過程、価値修正論、不変の価値尺度論というきわめて多様でしかも理論次元の幾重にも及ぶはずの内

容を含むものとなっている。やや奇妙な対比かも知れないが、例えば、マルクスがイギリス古典派の始祖としてあげたW・ペティの萌芽的価値論（A Treatise of Taxes and Contribution, 『租税貢納論』第四章余論）の在り方と比べるならば、彼のこの価値論の性格はまさにブルジョア社会の「社会」としての根本的性格を、かくなるものとして包み込んでいるかのごとき観を呈していると言いうるほどである。彼の位置がペティの対極にある以上、このようなことは当然であるにしても、そしてまたそのような関連からすると一見非常に見事な姿をとっているにしても、他方ではその編成内容を理解するということになると返って困難を伴うものともなっている。交換価値から価値修正論（いわゆる生産価格論）までを価値論として纏めるという構制をそのものとして理解することの困難である。もちろん、すでに数多のすぐれた考察があるのであって、リカード研究にとっては自明な事柄であると言いえよう。しかし、なおその解明にすでに当初に述べた関連において十分果たされてきたとは言えない側面が残こされているように思われるのである。以下において、その点に若干検討を加えてみようとするものである。

二 『原理』における「純化」の性格

マルクスがリカードの理論について論評したさい、すでに指摘したように、彼がスミスの成果の重要さに「気づいてもない」としつつも、理論そのもののもつ一貫性には高い評価を与えたのであった。この点に問題が生じるにしても、なおその評価に関して、マルクスのリカード理論の確認の仕方について、ただちに背首しえないことが生じてくる。彼が『原理』の原理的考察部分について内容上の整理を行ない、またその理論的性格の的確な指摘を与えているさいに、リカードがなぜスミスの問題について気づかなかったかを扱うはずの最重要部分についてそれはどの考慮を与えていないのである。その部分とは当然事柄の経緯からすると、『原理』第一章第三節というこ

とになる。その箇所についてマルクスは、ただリカードが剰余価値を利潤形態と同一視しているという欠陥の指摘に終始しているにすぎない。しかしながら、同じマルクスのリカード評価たるその理論的一貫性とこの剰余価値と利潤形態との同一視とは、当然のことながらリカードの対象把握の方法から生じていることであり、しかもそれを彼の問題意識の一つたるスミスとの関係からすれば、マルクスの指摘する「気づいてもいない」処理として現わされたリカードのスミスク服の仕方と軌を一にすることなのであろう。そうであれば、この第三節については、このような同一視にひそむリカードの理論的抽象の本体を闡明化しなければ、とりわけ彼のスミスに対する独自性も明確化されえないということになる⁽⁸⁾。

リカードが『原理』第一章のうちで、第一節（あるいは第二節）に与えた内容が、スミスの二面的価値規定を純化するためであったことはほとんど疑問の余地はない。そして、このようないわば前提的論議が彼の本題たる資本と労働との関係に基づく価値論を導びくためのものであったことも明白であらう。したがって、マルクスが周知のごとくスミスの「裂け目」に対するリカードの立場について考慮したさいは、それを容認しなければならなかったのである。つまり「彼〔スミス〕はむしろ、リカードが彼に対して正しく指摘しているように、逆に次のように結論すべきであつただろう。すなわち、『労働の量』という表現と、『労働の価値』という表現とはもや同じものではなく、したがって諸商品の相対価値は、それに含まれている労働時間によって規制されるのだけれども、労働の価値によって規制されるのではない、なぜなら、後者の表現は、それがはじめの表現と一致していたかぎりでのみ正しかったにすぎないのだから、と。」⁽⁹⁾したがって、このかぎりでは、リカードが明確にスミスを、対象（資本主義社会）の考察にとって必然的であるとした見地で、純化したとしてよいはずなのである。ところが、こうした彼の純化は、当然のことながら第三節での彼の考察と不可分であったとすると、なおそれだけではスミスに対する彼

の地位も十分な評価とはなりえないのである。この点は、マルクスのリカード評価自体にもすでに含まれているのであるし、また今日では周知の事柄でもありうるが、そのリカードの純化は、「後者の表現がはじめの表現と一致しているかぎりでのみ正しい」ということによつて、スミスの労働価値論と重なる性格たりうるものであるのかどうかということとしてさらに検討されなければならない関係を含むものだからである。

右の点は、言い換えれば次のようなことになる。すなわち、リカードがスミス価値論を純化したということのその純化の本質的性格とは何か、ということである。それは、通常スミスの二面的価値規定のうちの投下労働価値論の継承として指摘されているが、すでに前述のようなマルクスの批判にもあるように、またリカード自身も明確にしているように、労働の価値¹⁰＝賃銀とするスミスの見地の排除と不可分な側面を含むものであった。したがって、この側面は、単にいわゆる支配労働価値論の否定のみならず、投下労働価値論に含まれている労働¹⁰不変の価値尺度に対してリカードがどう対処しようとしたのかにかかわるものとなっているのである。もちろん、そもそも彼が、スミスの労働¹⁰＝本源の購買貨幣という命題を経済学における最も重要な学説として評価しながらも、なおかつ当の「学説」そのものについての固有の検討を与えたわけではないのである。それゆえ、彼のこうした言及をもつてすれば、彼のその評価のうちに直ちにスミス投下労働価値論自体にも及ぶ性格が含まれていると彼が解したと断定することはできないだろう。しかしながら、スミスのそれは労働¹⁰不変の価値尺度という理解を根底にもって成立しているのであつて、それを否定する見地で立ち向つたリカードにおいては、結局それに直面せざるをえない側面であつたはずなのである。

すなわち、リカードがスミスの価値論に対し二様の性格が含まれているとみたことは疑いがないのであるが、その性格が逆にスミスにおいていわば価値論として不可分な二面性たるものとみたかはむしろ疑問なのである。スミス

の価値論の性格そのものについては、いまここで改ためて考察することはできない。ただ先きに言及したマルクスの指摘に關説させるならば、スミスにとって「一致するかぎり」ではというのではなく、まさに「一致する」ことに最重要点があったことがむしろ肝要なのだということである。そこに彼の価値論の特性があるのであって、労働を不変の価値尺度とする見地も、そのために不可欠であった。したがって、スミスに相対したリカードには、すでに当初から、価値論のただ一方だけを問題視したとしても二面性そのものに直面せざるをえなかったのである。事実、彼は『原理』第一章第一節である程度スミス価値論の検討をしているのであるが、そこでもそうした事情を垣間見せる結果となつていられると思われる。例えば、彼は、『諸国民の富』第一篇第五章から次のような引用を行ない、それに対する彼の評価を与えている。『労働は、時にはより多量の財貨を、また時にはより少量の財貨を購買しうるであろうから、変動するのはそれらの財貨の価値であつて、それらを購買する労働の価値ではない、』それゆえ、『労働だけは、それ自体の価値において、決して変動しないから、それだけがあらゆる時および所においてすべての商品の価値を評価し比較することのできる、究極のかつ実質的標準である』というのは、決して正しくない。——しかし、アダム・スミスが前に述べたように、『さまざまな対象を獲得するのに必要な労働量のあいだの割合だけが、これらの対象を互いに交換しあうための規則を与えうる唯一の事情であるように思われる』というのは、言い換えれば、商品の現在または過去の相対価値を決定するものは、労働が生産する商品の比較分量であつて、労働者に彼の労働と引き換えに与えられる商品の比較分量ではない、⁽¹⁾ と言うのは正しい。」

右の文章中で彼がスミスのことを引用しそれについて議論している仕方には多々問題が生じうるであらう。いまここで、そうしたことにまで立ち入ることは不必要である。特に注意すべきことは、彼がスミスの、「労働の価値」に不変とする見地の成立基盤に注意を向けずに、批判しているのではないかということである。もちろん、こ

の場合に、彼に対してそのように問うこと自体無理なことと言えよう。たとえ彼が、『諸国民の富』第一篇第四章の最後の箇所でスミスが「交換価値の実質的尺度」という問題を立て、第五章で周知の価値規定を与え、そこで「不変の価値尺度」たる「労働の価値」という考え方を成立させているというように解したとしても、おそらく彼にとっては、それは「必要な労働量」＝「投下労働量」というものと区別されなければならないのであろう。

そうした意味では、彼はスミスにおいて二面的な価値規定を投下労働価値論と労働不変の価値尺度論というかたちで取り出していたとも言いうる。そして、その限りでは、彼はすでにマルクスに先んじてスミスにおける「労働の価値」＝賃銀、したがって労働＝本源的購買貨幣の見地のうちに資本・賃労働に凝すべき関係が含まれているという理解を示していたことになっているのである。もちろん、これは彼がスミスに相対したさいの立脚点であつたわけ、まさにそのように見るはずのことにすぎなかったのであろう。⁽¹²⁾

ところが、彼の場合マルクスのようにやがては労働と労働力との区別を可能とするようなコンテキストのうちでスミスを対象としていたわけではなかった。もっとも、そうであるにしても彼がスミスの労働価値論に内在する労働不変の価値を前述のような仕方で排除したのであるから、他面ではそもそも投下労働量というものの性格とは何かという問題に直面せざるをえないところに立たされていたとも言いうる。したがって、彼の『原理』では、おそらくその点と関連するものとみなしうるかのように第二節の考察が与えられているのであろう。もっとも、そこで十分な理解が示されているわけではない。というよりは、はなはだ不十分な議論で処理されているというべきであらう。労働の質的差異を価値論の内に含ませることになれば、とうていそのものもつ社会的基準形成の根拠を明らかにすることはできない。しかしながら、彼が異種労働に対して「市場」における「調整」であるとか、「価値の等級のなかの適当な位置に調整され配置され」⁽¹³⁾るというがごとき理解を与えたことは、かえってそれがス

ミスの労働に本源的購買貨幣における個々の労働に基づく価値論の世異に根ざしていることを示唆する結果となつていよう。それゆえ、彼としても、まさにそうなっているという意図とともに改ためて第三節で自からの労働価値論を提示しなければならなかったのである。あるいは、見方を変えるならば、彼が第二節でこうした問題を取り上げスミスとは異なる理解を示したこと自体が、逆に労働に不変の価値尺度とするスミスの見地に対する問題だけではなく、そもそもそこに含まれるスミスの労働価値論をどのように自己の理解として把握したのかが問われたということになる。

さらにまた、この第二節でのリカードの議論では、それ自体で個々の異種労働の社会的配置とまたそれらのもつ時期的安定的効果とを取り上げ、一見したところスミスの価値論の根幹をなす分業的労働を凌駕しているがごとき理解を示しているように思われる。つまり、きわめて抽象的であるにしろ、個々の私的労働に対し、「社会」としての経済的基礎過程を、すなわち労働の社会編成と時間的経過とに対する量的基準関係を形成しうる性格に注意を向けていると考えられるであろう。したがって、確かにスミスよりは洗練された論理のように見うるのである。ピン・マニユファクチュアを例証とするスミスの分業社会は見方によれば素朴であろう。しかしながら、空間的にであれ時間的にであれ、リカードが取り上げた個々の異種労働も、そのものとしては、あくまで単に価値形成的労働をそのものとして絶対的に前提し、それを量的にどう「調整」しうるかという議論を進めているだけなのである。したがって、社会を成すものとしての労働という水準では、すでにスミスによって与えられたことを受け入れているにすぎない。彼にとっては、その「調整」の根拠をなす労働についてはいまだその意味でも相対的なことであつて、「絶対」的な性格についてなお考察されなければならなかったはずである。

三 リカードの「労働過程」把握

リカードが第一章第三節でスミスに対する彼の積極的な主張を与えていることは周知のことである。そしてまた、その主張の要諦がスミスのいわゆる資財（ストック）の蓄積による価値規定の変更に対する批判であることも明らかである。しかも、そこでの批判はいわゆるスミスの第五章の世界に即するかたちで、つまりスミスの投下労働価値論を軸とする二面的価値規定の「社会状態」に立脚して、彼の見地を展開するということになっているのであって、この点からしても彼はいわば抜きさしならない事情のもとに自己の労働価値論の理解を呈示しなければならなかったはずなのである。この事情は、すでに彼が第三節の最初の部分で周知のようにアダム・スミスの「初期の状態」に言及して述べているところから推察できよう。そこでは彼は、「初期の状態」においても「若干の資本」が必要とされるとし、「それゆえ、これらの動物（ビーバーや鹿）の価値は、単にその捕獲に必要な時間と労働によるだけでなく、また猟師の資本、すなわちその援助によってそれらの動物の捕獲が行なわれる武器を備えるのに必要な時間と労働によっても、左右されるであろう⁽¹⁴⁾」と言っている。リカードがスミス批判をしたがって投下労働価値論の一貫性を意図し明確化するために与えたこの説明は、それ自身としては至極端的で明快のようにみえる。しかも、それはすでに第一節で与えた価値規定に対応して、ビーバーと鹿との労働の産物としての相対関係をふまえて説かれているのであって、彼の見地がごく自然に明らかにされているようなのである。つまり「商品の現在または過去の相対価値を決定するものは、労働が生産する商品の比較的分量」であると理解によって一貫性を与えられているように思われるのである。

ところが、先きの第三節冒頭の叙述では、彼は「たぶん彼自身によって作られ蓄積されたものであろうが、若干

の資本が必要であろう」という周知の考え方をもってスミスの「初期の状態」に対する彼の想定を示しているのである。この指摘は、スミスが『諸国民の富』第二篇の「序論」で述べている「初期の状態」を考慮すると、ごく当然にリカードにおいてはこのように処理されてしかるべきだと考えられる。彼がスミスに対して背負った課題からすれば、確かにそのようになるべきであったのであるが、彼の理論的処理としてはおそらく彼の意図よりはるかに重要な性格が伴うことになったと思われる。それはごく単純な記述にすぎないとしても、「彼自身によって作られ蓄積された」にすぎない「資本」が価値物として絶対的に想定されていることもつ意味にかかわってくる性格であり、ここに彼の「原理」に含まれる「困難」の一要因が介在していることを無視するわけにはいかない。「資本」を過去の労働の産物として把握することが、不十分であるとか、あるいはそれ自身としては間違いであるとかを問うわけではない。この点を古典派たるリカードについて云々する必要はないのであって、むしろそれを商品の価値要因として規定する仕方に着目しなければならない⁽¹⁵⁾である。

彼が第一節で労働を価値形成的としたのは、諸商品の生産に投じられる相対的労働量としてであった。したがって、このいわば生きている労働は、その諸商品の交換関係と表裏の関係にあって、実質上この交換（市場）の想定のもとで価値形成的であることが認められうるという仕組となっていた。それゆえ、よく言及されるように、彼は「絶対価値」を認めながらもこれについて積極的な論及を与えなかったのである。ところが、ここで「資本」について「彼自身の労働」の産物とし、これを直ちに価値として認定することはそうした理論と同様の筋道にはなっていない。つまり、交換に登場する商品の「相対価値」を決定するために投じられた「労働」とこの「労働」とは直ちには整合しえないはずなのである。この点は、彼が先きの文章に続いて次のように述べていることにも関係している。「ビーバーを仕留めるのに必要な武器は、この動物に接近することがより困難であり、したがって標的に対

してより正確であることを必要とするところから、鹿を仕留めるのに必要な武器よりも、はるかに多くの労働をもって製作されると仮定するならば、一頭のビーバーは当然二頭の鹿よりも多くの価値を持つであろう。」この場合でも、彼が例えば「二つの商品が相対価値において変動する、そしてわれわれはこの変動がどちらに現実起こったのであるかを知りたいと思う。もし一方の商品の現在価値を、……」というように理論を詰めようとしているのは、異なるものであることと解しうるのである。

右の相違は、一方では前述のように「相対価値」として交換（市場）を通ずる関係によって価値（労働）の性格を与えようとしている。他方は、そうした関係以前に「彼自身によって作られ蓄積」されるとか「はるかに多くの労働をもって製作される」とかというように、それゆえその「現在価値」がどう変動するか否かに関係なく、価値を決定するものとなっているのである。しかも、この後者は、第二節で「……価値の等級のなかの適当な位置に調整され、配置されて、今に至っている」としているような「労働」の「質」の相違をふまえているとも言えないのである。確かに、すでにその相違を彼としてはそう述べているかぎりでは、「はるかに多くの労働」とすることが可能だったのであろう。しかし、「彼自身」の労働ははまだ「調整され、配置されて」いるわけではないのである。したがって、この第三節の初出の文章は、第一節での相対価値⇨投下労働、第二節での労働の質的差異⇨等級の調整というような理論の運びよりいっそう下向的につめられた姿で労働に言及するものとなっているよう。そこで、このような労働を彼の理論によって理解するとすれば、やはり「絶対価値」と呼んでいるものに対応させる以外にないであろう。実際に、この節の展開全体についてはそのような点を根拠にして描かれているとしないような特徴をもっているのである。

もちろん、リカードが理論の展開のなかでそうした労働になるべきことを描く仕方は、かなり独得であり、かつ

どこまで明示的かということになると留保が必要となる。彼の展開に即するならば、前述のような指摘に続いて、彼は今度は周知のように、「両方の武器を作るのに同一量の労働が必要であるが、しかしそれらは耐久力を非常に異にしていると仮定するならば……」としている。これは、その直前に両者に投ぜられた労働量の相違という仮定を打ち消し、なんの手続きもなしに設けられた想定である。だが、彼にとって手続きを意識させなかったところに意味があるのであって、いわば彼が労働過程によって絶対価値を見出すことと、その所産を商品の交換―相対価値として把握することとが二重に生じているのである。これはもちろん、スミスが商品経済的個人と分業労働とをもって、価値を二面的に把握したとか、あるいは商品経済的価値規定とその現実形態とを乖離せしめていたとかの二重的性格と異なる。リカードにはスミスに存在しえた社会の根本要件とその現実形態との間に横たわるいわば余地ともみなしうるルーズな関係は認めえないことになっていた。したがって、投下労働は同時に商品交換の基本条件をなす資本の投下と並んで存在するように説かざるをえなかったのである。見方を変えれば、つまりスミースリカードと進められた経済学の流れからすれば、このことはごく当然であつたろう。スミスの分業的労働や商業社会は、リカードにおいてはすでに労働それ自体と資本との即応的關係として説くことにならざるをえなかったからである。

このような構造は、第三節でのごその展開ではいっそうはつきりさせられているように思われる。「社会の初期の段階において、猟師の弓と矢、および漁師の丸木舟と漁具とが、共に同一の労働量の所産であつて、相等しい価値と相等しい耐久性をもつものと仮定しよう。」ところで、のちに言及するように、彼がこのような理解を「社会」の根底に据えるに先きだつて、一種の産業別社会編成とも言うべき視点を示している。おそらく、スミスにあえて対比するならば彼の分業的労働社会に相当するものと思われるものである。そうした理解を前提とし、リカードはこのように最も抽象的な経済的基礎過程を描いている。これを彼が「価値」として表出した「社会」として解する

ならば、確かに労働に基づいて支えられたそれだとみなしうる。ところが、その場合でも、彼の主張は同様に「社会」の根底を支える労働に基づいて価値を規定したスミスとは相違する性格を帯びざるをえなかった。これは当然であるにしても、この事柄がリカードに対して「困難」を孕むものとさせていよう。彼が「同一の労働量」「相等的な耐久性」というときには、自然―労働というスミスの図式に代わる資本―過去の労働の所産（としての第二の自然）―労働として対比することができるとして単純な性格となっていない。

しかしながら、右のような単純な経済的基礎過程の構図こそが、価値―労働として商品経済に基づく社会的生産の究極的基準設定となっているものとせざるをえないだろう。言うまでもなく、彼の「社会の初期」はスミスによって与えられたものであるが、これはまた同時に、スミスがそこで明らかにした社会存続の物質的条件とその商品経済的基準の根拠とに対し、必然的に重ならざるをえない関係を受け取っていよう。事実、リカードの表現からしても、「獵師」であれ「漁師」であれ、彼らはスミスと同様の意味で自然に相対し、そこに商品経済的基準形成のための働らきを行なうものとされている。それであるからこそ両者の「労働の所産」も「価値」として「正確に等しい」とされえているのである。言い換えれば、彼にとって、労働―価値基準という設定が首尾一貫して貫徹しうる」とすると、このような構図として主張せざるをえなかったのであって、だからまた、「同一の労働量」は同時に「一日の労働の所産」として、自然対労働の姿によって把握され、ひとまず「労働と労働の生産物の等置」を通じて価値を「社会」的たらしめようとも試みているのである。もちろん、この「等置」はスミスとまったく同様のことになっているわけではない。それぞれ資本を直接的な労働（獵師・漁師）の産物として相互に「等置」している限りのことである。とはいえ、その限りで成立しうる「価値」の社会的基準としては、彼にとってはこのような想定に立ち帰る以外に理論的な決め手がありえなかったところに、重要な意味がある。

先述のように、スミスにおいては「分業」労働として、しかもその労働の担い手の側は個々人として「社会」に基準を設定しうる「本性」の所持者であった。リカードも、おそらく労働に着目した限りでは、つまりスミスの「本源的購買貨幣」に同感した限りでは、その労働に立脚しているはずだと了解していたであろう。そこで先述のように「猟師」と「漁師」とを共通項で括するという想定を与えたと思われる。ところが、スミス自身の経緯からも明らかのように、そうした個人の「本性」が「社会」を成しうるという場合、それがたまたま人間の経済的活動という一側面についてそのようなことを可能にするという限定的な視点を提出したわけではなかった。その「本性」はまさに *human nature* として人間の根本をなし、したがって「社会」の本質の規定をなすものとして理解されていた。それゆえ、これに基づいて与えられる社会は、他をもって「社会」は成しえないということと同義なのであって、単に一経済的活動と社会との関係ということにはならない性格をもっているのである。そのため、スミスが労働生産過程に基づいてつまり「労働」本源的購買貨幣」という見地に基づいて労働価値論を明らかにしているさいに、単に、その労働生産過程があらゆる社会に共通な経済的基礎過程に対応し、そこで社会の経済的生活条件を満しうることの理論化が可能とされた、ということとで処理されてはならない内容が確保されているとすべきなのである。つまり当然ながら、その過程は「社会」を社会たらしめるものとして明らかにされたものである。

もちろん、リカードにスミスと同様の哲学や思想的見地を求めることはできないし、またそうした点からする彼の理論への批判的議論も的外れであろう。しかしながら、前述のように、彼がスミスに立脚したかぎりでは少なくともあるコンテキストを維持しなければならなかったのであって、その意味で、労働（「労働日」と資本（過去の私の労働の産物「耐久性一定」）とによって彼なりに社会の経済的基礎過程を抽象化せざるをえなかったゆえんを見るべきであろう。そして、まさに右のような関係において、リカード労働価値論の「強み」「弱み」も生じている

と考えられるのである。当然のことながら、彼の取り上げた労働は最早スミスのごとき個々の労働そのものではない。彼の与えた資本とともに存在しうるものである。しかも、その資本は、スミスとの対比でみれば、彼が「産業」論によって事實上社会の物質代謝過程、労働生産過程を説明することになった点に対応して、個の労働に代わり「社会」を担う性格に位置づけられていることになろう。これを労働そのものの側からみれば、それが二つの性格に分化することを前提し必然化していることになっているわけであって、最早スミスのごとき安定的な個—社会の構図を描きえない仕組になっている。彼がなんの理由もなしに、労働と資本との所持者を分離させたさいにも、それが可能であるとしたのはスミスの命題に即して根源のところは労働によるものとしているかぎりでスミスの本筋を継承していると考えたためであらう。しかし、そうした彼の意図はいわば概念の聞き合いになってしまっているのであり、なるほど彼は一種巧妙さをもって資本—労働を価値関係であるかのように仕立てたのであるが、それはスミスを土台にするかぎりそのように仕立てることの無理を伴う結果をも含まざるをえなかったのである。スミスが労働—社会の世界と区別して、労働—資本の関係を設定したことは、その理由の如何を問わず結果としてはその聞き合いを避けたことになる。あるいは彼がそもそも「資本」なるものに「社会」とは微妙に染みにくい観点を持ちあわせていたこと、これはまた「労働—本源的購買貨幣」の理解と表裏の関係にならざるをえないこととして当然の処理をなしたといえよう。リカードが対象（資本家社会）をより厳密に説明するところに進み、資本と労働の世界を確定する作業に至りながら、つまりその世界に価値の関係をみようとしながらも、このような経緯からしても、「資本」に対する社会の關係に困難を持ち込まざるをえなかったのである。

もっとも、リカード自身の筋道からすれば、第一節での「相対価値」決定の原理を優先する理解によって、資本と労働との先きのごとき本源的關係もその相対性によって与えられたものとするになっている。つまり、彼は

周知のように次のように主張するのである。「かりにわれわれがいつそう進歩の遂げられた技術と商業とが繁栄している社会の状態を観察しても、なお諸商品の価値がこの原理にしたがって変動する、ということを見出すであらう、例えば、靴下の交換価値を評価するにあたって、われわれは他の諸物に比較した靴下の価値が、それを製造して市場にもたらすのに必要な総労働量に依存する、ということを見出すであらう。」このようにして彼は、「靴下の交換価値」を規定する「総労働量」について、第一の原綿栽培の労働から第五の小売商人の労働と他の多くの関連労働を示唆する。そして「これらさまざまな種類の労働の総計が、この靴下と交換されるべき他の諸物の分量を決定し、同時に、それらの他の諸物に投下されたさまざまな労働量に関する同一の考慮が靴下に対して与えられるべきそれらの分量を、同様に支配するであらう」とする。このリカードの労働―価値の規定は、実は社会―総労働という前提のもとに、その社会を具現する諸産業の資本（の生産物「商品」）を通じて相対的に分割して取り出しているにすぎない。だから、ここでは労働が価値を形成するという関係がすり抜け、いきなり諸資本のもとに配分されている労働をその産出物である商品の価値決定者であると規定しているのである。したがって、諸商品の一可除部分として各商品は相対的にその価値を実現するという自明な議論に落ち着かざるをえないことになる。したがって、彼には良かれ悪かれスミスのごとく個―社会をあるいは商品経済が個（人）のうちに社会を表出するという特性を積極化しがいなことになっているのである。これは確かに彼の「原理」の構造に、商品経済社会という視点からすると一種の不適格を生じさせたとも考えられよう。しかし、産業資本に基づく生産過程の支配という点からするならば、そうした犠牲がひとまず不可欠であったとも言いえよう。⁽¹⁷⁾

あるいは、別の見方すなわちスミスがその解決を後に残こしたという関連からみれば、リカードは「自然価格」の支配を優先させつつスミスの価値論を受けとめなければならなかったのであり、この「資本」の同質性の結接点

に価格—価値関係を凝縮させうるものとしてスミスの命題を求めざるをえず、そのためひとまず彼のごとき処理つまり自然価格の形成者と価値の形成者との合成による価値の規定であつた。したがつて、こうした観点に基づけば、リカードには、スミスが労働を価値の形成者とし同時にその尺度としたような意味での価値尺度を、個の原理に基づく必然的な要請として説く意義は存在しえなかつたのではないかと思われる。つまり、彼がスミスの労働^二本源的購買貨幣に内在する価値尺度の側面を否定し、新たに貨幣的商品によってそれを与えようとしたことはそのこと自身の正当性とは裏腹に、最早根本的に彼が継承したと理解したスミスの当の価値論の根本性格をも問わざるをえないことにもなつていたのである。

四 おわりに

リカードは、スミスの残こした課題に半ば答え半ば答えることができなかった。したがつて、一見スミスの二面的価値規定に対して見事に一元化した価値規定を貫ぬく論理を構成しえているかのようにみえながら、十分そのコンテキストをたどりえない困難を残こした。しかしながら、その困難は古典派としての枠内からすれば、きわめて大きなものといえ、スミスがいわば見事に回避したことに比べるなら、彼はむしろ慎重な理解を与えたというべきであろう。問題は資本の支配する生産過程をいかに理論化するにかかつていたのであるが、その点についても彼とスミスとの対比でみれば、後者が資本の支配を巧妙にはずし、分業論との関係から社会の経済的基礎過程を構成しえたということ以上の問題を抱えたのである。そのスミスを越えさせている地点は、リカードにとつて資本と労働との関係に直接的な価値^二価格関係を確認しなければならぬということであつた。しかも、これはけつして自然な事情であつたのではなく、当然のことながら産業資本によって生産過程が支配されるということの正確な表現

を受けとめたためにほかならない。産業資本は労働力商品を価格形態で受けとめ、同時にその生産物たる商品を価格形態を通して実現する形態であって、この性格に基づく考察が要求されるのである。したがって、リカードはむしろ学説史的にはじめて資本と労働との関係を対象にした解明の真の課題を背負ったとも言いうる。

したがって、マルクスがスミスとリカードとを対比し、後者が資本と労働との交換によって生じる変化を見逃したと批判していることは、必ずしも当を得たものとは言えない。むしろ、リカードの関心に即してみれば、その交換さえもが彼のいわゆる「相対価値」による「交換」との差異化を現わさず、しかも資本と労働との「交換」として「相対価値」を全面化するという事柄によるものであった。そしてまた彼をしてそのような課題を設定させたものも、ほかならぬ産業資本そのものなのであって、これはスミスが彼の思想的営為のうちに練りあげ構築することになった対象の独自の理論的表現を、むしろ商品経済そのものの表現として彼に受けとめさせるべきものとして現われていた。それゆえ、彼が資本の「一般」的性格に基づいてその生産過程を維持するあるいは同化するその一点を確保しなければならなかったのであり、そのためにスミスのごとき「移行」的処理は不可能だったのである。当然なことであるが、この点に彼のスミスに対する発展があった。しかも、その発展について、彼がスミスをふまえていたこともきわめて重要な意味をもっており、スミスの労働 $\equiv$ 本源的購買貨幣によって見出された労働生産過程を固持することによって、単なる自然価格 $\equiv$ 生産費的水準を越えた見地の根拠にまで至りえたと言えよう。

しかしながら、リカードがスミスを継承するものとしたその根本的命題も、じつはすでに単に社会の経済的基礎過程をそのものとして把握したものではなかった。それは人間と自然との関係を商品経済的關係として実体化したことをもって表現されているのであり、この関係 $\equiv$ 実体という性格はリカードに対しても強固な拘束力をもたらずにはいなかったのである。したがって、彼が労働に対する客体としての資本を取り出したさいにも、すでにその

資本は關係^ニ実体によつてはじめて意味をもっていたのであり、それゆゑそれは過去の労働としての実体と、必ずこの資本と並ぶ他方の資本という關係において、労働を相対化することになったといえよう。そこで、彼にとつては資本は、この後者の側面からすれば自然価格において表現されるべきものであり、また同時に前者の側面において価値を実現するべきものとしてもあるとされざるをえなかった。スミスは、労働に対する客体を自然的対象とし、ひとまず分業論をもつて特種化しえた世界によつて資本關係と区分けしえたのであり、そのかぎりでリカードの直面した事柄から免れることができた。これは、その抽象の次元によつてみれば、スミスは資本關係を社会の外枠としてあるいは二次的關係として相対的に設定することによつて、それだけ社会の經濟的基礎過程に対する実体的把握をより積極的に考察することになったといふことであらう。これに對し、リカードは、資本關係を「社会」そのものの經濟的表現として設定したのであつて、それはすでに生産の一方の主体でありしたがつてその出発点であり結果でもあるところの關係において対象を把握しなければならないといふことになつていた。したがつて、この關係からすれば、その限りで包摂される生産過程をある「社会」の一般的表現として指示しなければならないのであり、そのようにして実体化しえたものがようやく第三節に現われた漁師と獵師との關係という始源的生産の姿であつた。

もちろん、そのようにして設定された生産は、文字通り生産の実体的「關係」になつており、資本と労働との關係とその生産物相互の關係が労働実体と無理なく統一されているように表わされている。そのかぎりでは、リカードの『原理』はむしろここを出発点として論理的道筋を描いてゆくべきであつたとさえ思われる。というよりむしろ、彼は實質的にはそのように価値論の理論を進めるとみなすべきであらう。つまり、彼はそもそもスミスのごとく個々の直接的生産者の想定に基づいて社会を設定するような方法によつて「原理」を明らかにしているの

はない。それゆえ彼が「価値について」の章でまず相対価値を決定する「法則」について明らかにしているさいにも、当然のことながら、資本と労働の關係とこの「法則」とを相即的なものとしている。資本はその「法則」に対して「過去の労働」として登場するにすぎないのであり、それによって事柄になんらかの変化が生ずるわけではない。したがって、根本的には、「第一章」「第一節」で明らかにされたことはスミスの二面的価値規定批判というものであつて、そのかぎりでは彼の立脚する積極的な労働価値論の見地が示されているという性格をもち、スミス批判の実質的な内容は「第三節」移されていることになっている。

さらにまた、すでに言及したように、その批判のうちにリカードが「正しい学説」として継承した投下労働価値論が、スミスにおいて個々の直接的生産者としてそのものの直接的「労働」によって社会を「実現」するという独自の性格に基づいて展開されたものである。それゆえ、このようなコンテクストからすれば、彼は「第一節」においてはその「正しい学説」に基づいて「相対価値」を決定する原理を説いたとも判定しがたいように思われる。なるほど、彼は巧妙にもそこでは「絶対価値」について明示することを避けた。しかしながら、スミスにおいて確定された労働―社会の要件を彼が「気づいてもいない」はずはないのであつて、「第三節」こそ彼にとってのその要件の満すべき位置となつていたのである。もっとも、労働の所産としての「資本」を定位し、それとともに「社会」を確定したときには、すでに労働―社会の構図と労働―資本の構図との相違を避けることはできなかった。あるいは言い換えれば、彼はスミスの労働―社会の構図に即するかたちを継承したのであつたが、したがって労働―過去の労働（資本）―社会を描いたのであつたが、そのさいにこの中間項がすでに媒介された形態であることを要求されるという事態に直面し、その労働―社会との差異を彼の理解として開示せざるをえなかったのである。

それにしても、スミスが思想的営為によって「資本」の異化作用に対していわば自制しえたのに反し、リカード

はそれを踏み越えたのでありかつまたすでにそのような自制も許されなかった。しかもまた、そのようなスミスの克服は、事実上彼が直面した事柄からすれば、きわめて重要な経済学説史上の位置に彼を追い込むこととなったように思われる。それは端的には、スミスのごとき構図に立脚すること、資本と労働との構図を成立させることとの⁽¹⁹⁾ 関ぎ合ひであつて、その結果はいわば価値関係と価格（自然価格）関係のそれとして問題を生じさせるものであつた。彼がその点を第三節の抽象像を土台に以下修正論を展開していったことは、一面ではその構図に対し、肝腎のところではスミスを堅持しようとした彼の古典派としての苦心の方法であつたと言いえよう。そしてその限りでは、きわめて素朴なかたちではあつたが、労働過程に基づく価値論と、資本による生産過程支配を各産業への労働配分というかたちでの価値法則に対する認識とを明らかにすることができたのである。しかも、この後者の側面は、スミスが彼の独自の思想で——かつまた一時代の思想の帰着点として——支えた個人—労働—社会を克服し、その労働が資本投下のもとで抽象化される労働協同性として確保されるという対象把握の深化をもたらしうることになつてゐる。おそらく、この点がまたのちにマルクスの着目するところとなつたものと考えられよう。

しかし、他面では彼がスミスを克服するために設定した労働過程は、労働がいわば即目的に自然と相対するといふスミスのそれとは異なり、資本を介するものとしてしたがって関係—社会として労働を二次化する性格としてゐる。労働の価値形成的性格は資本の他資本との関係を含みつつ、確認されざるをえないのである。したがって、この側面からみれば、そのものとして価値形成的とされる労働も、スミスのごとき主体化されたものとは異なり、いわば関係的主体ともすべき在り方へとずらされてゐるのである。これは、彼が最初に相対価値を決定する原理にスミスを登場させた経緯からみると、一種の転換であつて理論の道筋に起こる反転で混乱を生じさせかねないことなのである。だが彼はそこに自覺的な考慮をしていないのであつて、それがまた逆にその相対価値をやがては彼の抽

象像としての二資本間の労働の在り方によって一貫させようと考えていたからであろう。だが、こうした彼の価値論の決定方法は、すでに周知のように、一方ではスミスの決別であったし、他方では価値と自然価格との融合であって、ただ彼が前者を意識しなかったことによって、あたかも価値基準を核としながら、その外周が次第に価格領域を拡張しつつ「社会」を現実化するという手法として展開されている。そのかぎりでは、『原理』においてスミスも十分生きていたとも言いうるであろう。

(1) リカードとマルクスとの学説史的関係とりわけマルクスの「経済学批判」におけるリカードの取扱いに含まれる問題についてはすでに以下の小論で若干の検討を加えておいた。参照されたい。「マルクスのリカード批判(序説)」(『経済志林』第五〇巻第三・四号合併号、一九八三年三月、所収)、「マルクスのリカード批判」(『経済志林』第五一卷第二号、一九八三年一〇月、所収)。

(2) この点については、さしずめ時永淑「スミスとマルクスにおける二重の社会像」(『経済志林』第四四巻第四号、一九七六年)一二月、所収)を参照されたい。なお、スミスの労働価値論を源泉としつつ、その影を落とすことになる「社会像」の問題としては、以下でふれるように、リカードに対してもやはり微妙な作用を及ぼしたものとも考えうるように思われる。

(3) とりわけ、リカード、マルクスにおける生産価格論の成立視点による検討については、桜井毅『生産価格の理論』(東京大学出版会、一九六八年)を参照されたい。なお、以下においては、リカードの「遺稿」にみられる「交換価値」と「絶対価値」との関係について特に考察を加えているものではないが、その点の理解については拙稿「リカードの労働価値論」(『経済志林』第四六巻第二・三合併号、一九七八年一〇月、所収)において若干の検討を行なったものを前提としている。

(4) 前出拙稿「マルクスのリカード批判」を参照されたい。なお『経済学および課税の原理』については、『原理』とのみ略称。

(5) MEGA, 2 Abteilung, Band 3, Teil 3, S. 1058. 大月書店『マルクス 資本論草稿集』6、『経済学批判』(一八六一

一八六三年草稿」Ⅲ。六一五ページ。

- (6) ここには根本的には、スミスーリカードの流れにおいて、経済学に対するいわば位置づけの変化を見なければならぬことも存在するように思われる。それは例えば、思想的にみうるスミスと経済学そのものの見えざるをえないリカードとの対比であろう。あるいは歴史的にみれば、経済学がいわばパラダイムの変化とともにまたそのものもつ性格を変えているかも知れないということでもありうる。このようなことを念頭に置くことも必要なのであるが、小論ではあくまでも、スミスの提起した労働価値論によって生じた問題として検討を行ない、右のような事柄について間接的にであれ考慮しうるのではないかと意図している。

- (8) 周知のように、『原理』第三版第一章第三節は、リカードの労働価値論におけるいわゆる「弱化」の問題が介在している。第三版での彼の叙述変更によって生じたことであるが、これをめぐる考察検討については小論では、彼の労働価値論そのものの性格を説明するという目的からして、とくに行なっていない。今日までにすでに詳細な検討も進められており、やはり究極的には『原理』で表明されている彼の価値論をいかに理解するかが、この問題の帰着点をなすのではないかと思われる。なお、諸議論をふまえて、きわめて明快な整理と吟味を与えているものとして、羽鳥卓也教授の『リカードウ研究』（未来社、一九八二年二月）中の「第四章 価値論と『社会の初期段階』」がある。非常に興味ある議論を進められているので、多くの示唆を受けたが、教授の見解をふまえた議論も小論の範囲を出るので別の機会を期したい。

- (9) MEGA, a. a. O, S. 366『草稿集』5・II 五七ページ。

- (10) 労働不変の価値尺度というスミスの理解を彼の支配労働価値論の論理であるとする議論も多々行なわれている。リカードのスミス批判の視角からするとそうなるとみる見地や、そもそもスミスにおいてもそうであるとする場合もある。後者については、すでに別のところで検討を行なったので、ここではとくに改めてふれるものではない（拙稿『経済学批判』体系の一考察、『経済志林』第四二巻第一号、一九七四年七月、所収、を参照されたい）。前者については、本文中でも考察しているように、リカードがそう判断したことがむしろ彼の労働価値論認識になにか重大なスミスとのいわば誤差を生じせしめたということになったと思われる点から注目せざるをえない性格となっているのである。なお、この点に関して、「価値尺度」論の問題からリカードにおいて「スミス価値論を超えるものと、逆にリカードに残るスミスの理解の一面」を考察している小黒佐和子「リカードウの労働価値説」（平林千牧編『経済学説史研究』、時潮社、一九八二年、所

収)をも参照された。

- (11) On the Principles of Political Economy and Taxation, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by Piero Sraffa, Vol. I, p. 16—17. 堀経夫訳『経済学および課税の原理』(雄松堂『デヴィッド・リカード全集』第一巻)一九ページ。傍点はイタリック体。なお、以下では『Principles, 原理』とのみ略記。

- (12) とはいえ、リカードがスミスの「初期未開の社会状態」について十分自覚的ではなかったのではないか、ということからすれば、前出の第一章第一節におけるスミスの正否を検証し、同時にすでに彼自身の労働価値論を説くことになっている場合と、のちに第三節の「社会の初期段階」の想定に伴うかたちで説かれる労働価値論の場合との対応関係に、微妙な理解の困難が生じうるように思われる。なるほど、彼は「アダム・スミスの考えでは、社会の初期段階では、労働の全生産物が労働者に帰属した」(前出 *The Works*, Vol. VI, p. 377. 『全集』第七巻、四四〇ページ)ことを十分承知していたとしても、彼にとっては、その「状態」がまず「相対価値」の問題として扱われ、のちに改めて今度は自からの「社会の初期段階」の「想定」として別箇に処理することによってある種の落差が生じうるのである。

- (13) *Principles*, p. 20—21, 『原理』一三三ページ。

- (14) Op. cit., p. 23. 同前訳、二六ページ。以下『原理』第一章第三節からの引用については、煩瑣を避けその引用ページについて省略する。

- (15) それにしても、リカードは、「資本」が登場しても、労働の生産物が誰に帰属するかについては「価値」の問題について無関係としている。スミスに対して労働者に帰属する点に注意を向けながら、彼自身では問題にしていない。あるいは、この点については「価値」の抽象的根拠としてはごく当然のこととすることによって、彼はそのかぎりで基本的にはスミスと同様の世界に立脚するものとしていたのであろう。

- (16) *Principles*, p. 17. 『原理』一〇ページ。

- (17) マルクスは周知のように、古典派はP……Pの生産資本循環をもって資本家的商品経済の性格を解明しているとしているのであるが、この一般的批評の当否そのものについてはともかくとして、リカードについては、一面でそう思わせうるものがありうるようにみえる。このように、少なくとも彼が「資本」とともにその背後に一種の社会的な「労働協同体」的在り方を労働の配分図式のうちに描きえているのは、おそらくそのためだとも言いうるであらう。これは、スミスのこ

とく「資本投下の自然的順序」のような理解とは異なるわけであって、リカードの側にこそマルクスの評価も意味がある。

(18) この点が彼にとって最後の問題として「遺稿」で論じられた。なお、その検討は、拙稿「リカードの労働価値論」(『経済志林』前出)を参照されたい。

(19) 時永淑「スミスとマルクスにおける二重の社会像」(前出、『古典派経済学と「資本論」』所収)に示されたきわめて重要な学説史上の問題に、おそらくリカードもこの意味で参加しているはずであろう。もっとも、彼の理論が他面で経済学の性格に重要な転換をもたらす要因が(ミル―新古典派)含まれえたとするならば、なお充分な考察が行なわれなければならないであろう。この点はまた本稿の範囲をはるかに越える問題である。